



Title	日本文化学系統の授業理解を支える「やさしい日本語 チャットサポート」の応用可能性
Author(s)	松岡, 里奈
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2024, 22, p. 43-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本文化学系統の授業理解を支える「やさしい日本語 チャットサポート」の応用可能性

The Applicability of "Easy Japanese Chat Support" in Supporting Understanding of Lectures in Japanese Cultural Studies and Japanese Literature

松岡 里奈

【要旨】

本稿では日本文化学系統の授業の国外遠隔配信事業において行われている「やさしい日本語チャットサポート」（以下、やさ日チャットサポートと略す。）に関わる三者を対象に調査を行い、やさ日チャットサポートの応用可能性を明らかにした。まず、やさ日チャットサポートが行われる授業の配信先の国外の受講生からは、【足りない日本語能力の補助】【講義内容理解の補助】【講義内容理解の深化】として有効性が認められていることがわかり、また授業者は、学生の視点が授業者に集まらなくなる可能性への危惧はしているものの総じてやさ日チャットサポートの有用性を評価していることがわかった。やさ日チャットサポートの実施者を対象にした調査から、やさ日チャットサポートの思考と作業段階のいずれもで困難を感じるものの、その大半は実践を重ねれば解決されていくことと、《口頭のみ情報の取捨選択》と【行程の重なり】が最重要課題となることがわかった。これらを実施者が認知しておけば、やさ日チャットサポートの応用可能性は十分あると言えるだろう。

1. 本稿の目的

本稿は、大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、センターと略す。）の日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業（以下、拠点事業と略す。）において日本文化学系統の複数の教員によるリレー講義（センター通常授業）の国外同時配信という取り組みの中で行った、「やさしい日本語チャットサポート」（以下、やさ日チャットサポートと略す。）の実践について報告し、やさ日チャットサポートを別の場で応用する可能性を探るものである。そのために本稿では、まず、やさ日チャットサポートが行われる授業の配信先の受講生（国外の学生）から、やさ日チャットサポートはどのように評価されているのかを明らかにし、その価値を確認する。次に、やさ日チャットサポートの対象となる授業の授業者を対象に、やさ日チャットサポートが行われることに対し不安や懸念事項がないか明らかにする。これは、もしやさ日チャットサポート対象となる側の人間が、やさ日チャットサポートに対し不快な感情を持っている場合には、やさ日チャットサポートを実施し続けることは避けるべきであろうし、他の場への技術の転用の未来も描くべきではないと考えているからである。また、やさ日チャットサポートの応用可能性を探るためには、実施者のほうにも視点を移さなければならない。やさ日チャットサポートは3.1.で後述するが筆者が実践を重ねて開発した手法で、やさ日チャットサポートを遂行するには、①3.3.で説明する筆者が開発したやさ日チャットサポートの手法を知ること、②一定のタイピング能力、③易しさの判断をするための一定の日本語教育学関連の知識が必要になる。しかしこれらがあれば、誰でもうまく活用できるのであろうか。そこで、筆者の代わりに①～③を兼ね備えた人員にやさ日チャットサポートを実践してもらい、彼らへの調査からやさ日チャットサポートを実施する際の困難点を明らかにしていく。それにより、筆者以外の他者が他の場において応用していく際に、やさ日チャットサポートを行うのかどうか決める判断材料にもな

り、実施する場合には困難点を先に知っておくことにより心構えができるだろう。本稿を通して、やさ日チャットサポートの応用可能性について明らかにし、誰にとっても「やさしい」世界を創る一助としていきたい。

2. 背景

本節では、やさ日チャットサポート実践の背景を説明する。2.1.でやさ日チャットサポートが行われる科目の概要について説明し、2.2.でやさ日チャットサポートが行われている国外遠隔配信事業と遠隔で受信する大学について説明する。2.3.では国外で受信する学生がどのようにやさ日チャットサポートを受けているのか説明する。

2.1. やさ日チャットサポートが行われる科目概要

本稿におけるやさ日チャットサポートは、センターで開講されている「日本思想文化学研究基礎」という通常授業を、国外に遠隔配信する事業で行われているものである。この授業はセンターでは毎週火曜日の1限に設定され、日本文化に対する理解を深めるために、様々なテーマを通して日本文化の知識や日本人の思想を幅広く学び、歴史学、文学、仏教学、民俗学、比較文化学などの観点から、多様な日本文化についての幅広い知識を身につけ、日本文化に対する理解を深めていくことを目的にしている。この授業はセンターに所属する上記の各分野の教員約10名と本学大学院応用日本学コースで民俗学を専門とする教員1名が、1回につき1つのテーマを取り上げて順番に教えるリレー講義形式で行われる。科目で設定されている日本語レベルはB2とされ、センターの学生はB1～C1の学生が受講できる選択授業となっている。学生の学習意欲向上の狙いがあるため、「なぜ日本の絵や人形はこちらを向かないのか？」や「日本人はなぜ神社とお寺の両方におまいりするのか？—日本における「神仏習合」の展開—」のように、全ての授業が「なぜ～なのか。」という疑問形式のタイトルに設定されている。

2.2. 国外遠隔配信事業の概要と受信大学概要

この実践は、2.1.で説明した授業を、拠点事業の一環で、2020年より中国とタイの複数の協定校にZoom（Web会議システム）による同期型配信を行っている。中国への配信は、国際的な対応に向けた取り組みの一環であり、本学グローバルイニシアティブ機構（GI機構）と本学東アジア拠点との連携で行われている。中国へは表1の通り、2020年度春～夏学期より配信が開始され、2023年度春～夏学期までに計8大学、延べ1722人の学生に配信された。

また、タイへの配信は、本学ASEANキャンパス並びにASEAN拠点事務所が置かれているタイの学術協定校との教育的連携強化のための配信と位置付けられている。表2の通り、タイへは2020年度秋～冬学期より配信が開始され、2023年度春～夏学期までに計3大学、延べ282人の学生に配信された。

なお、この2か国の選定は、日本時間午前8時50分から開始される1限の授業をリアルタイムで受信可能な時差も関係している。

2.3. 遠隔配信される授業の受講方法

配信される授業はセンターの遠隔配信用教室にて行われる。ここでは本稿に必要な情報に

表1 中国の受信大学と受信者数

年度	2020		2021		2022		2023	合計
学期	春夏	秋冬	春夏	秋冬	春夏	秋冬	春夏	
配信回数	10	14	14	14	14	14	14	94回
同済大学	191	0	37	23	0	20	9	280人
上海交通大学	46	38	24	14	1	16	13	152人
大連理工大学	29	123	373	46	5	65	19	660人
浙江大学	—	14	14	7	0	0	4	39人
東南大学	—	—	227	0	157	0	0	384人
清華大学	—	—	—	25	0	0	0	25人
北京大学	—	—	—	7	0	0	24	31人
西安交通大学	—	—	—	—	—	151	0	151人
参加人数（延べ）	266	175	675	122	163	252	69	1722人

表2 タイへの配信の受信大学と受信者数

年度	2020	2021		2022		2023	合計
学期	秋冬	春夏	秋冬	春夏	秋冬	春夏	
配信回数	14	14	14	14	14	14	84回
タマサート大学	49	16	69	15	25	3	177人
泰日工業大学	—	—	—	28	11	2	41人
ランシット大学	—	—	—	42	16	6	64人
参加人数（延べ）	49	16	69	85	52	11	282人

限って遠隔配信システムを説明するため、遠隔配信システムの詳細は松岡・中谷（2022）を参照されたい。図1の通り、教室ではその日授業を担当する授業者が教壇に立ち、PPTをスクリーンに投影し、通常通りに授業を進め、図2のようにセンターの留学生は教室内で受講する。また、後方にもスクリーンが設置され、そこにはZoom画面が投影される。そのため、授業者は教壇に立ち、教室内学習者の様子と、Zoom参加者の様子及びチャット画面を同時に確認することができる。なお、国外からの受講生は時差の関係で早朝の受信であるため、カメラをオンにするかどうかは一任している。



図1 教室の様子

また、受信側の学生から見たZoom画面は図2の通りである。この配信映像は、教室内で受講する際の視覚とほぼ同様の視覚で受講できるようにしている。また、右上に教室の様子を薄く映し出すことにより、授業者と教室の学生のやりとりが発生した場合にその様子がわかるようにしてある。また、教室内で受講する留学生の様子を確認することができることで、自分が留学した場合の想定ができるようにもなっており、ある意味では留学の疑似体験であるとも

言えるだろう。

配信業務を行うスタッフは、2022年度春～夏学期までは拠点事業担当者である筆者が、入室管理やZoom上での映像・音声管理・やさ日チャットサポートを行うために、共同ホストとして参加した。2022年度秋～冬学期及び2023年度春～夏学期には筆者に加え補助役の参加があったが、2023年度秋～冬学期には、遠隔配信業務をサポートする大学院生2名がTAとして配属され、この2名が共同ホストとなり筆者が担っていた役割を担い、筆者は管理業務や遠隔配信トラブルに備えた。



図2 受信側の学生から見たZoom画面

3. やさ日チャットサポートとは

本節ではやさ日チャットサポートについて詳細を説明していく。まず、3.1.でやさ日チャットサポートが生まれた経緯について説明し、3.2.ではやさ日チャットサポートの方法を説明し、そして3.3.では、やさ日チャットサポート実践の先行研究を確認する。

3.1. やさ日チャットサポートが生まれた経緯

拠点事業では2015年からこの遠隔配信システムの構築を行い（cf. 藤平，2018）、筆者は2019年度に着任したが、その年にはそのシステムの機材面での構築がほぼ完了した。2020年度からは特別授業配信から通常授業配信に切り替え、その年度内には問題なく安定的な配信が可能となった。ここまでの、配信システム（機材面）の構築をしてきたフェーズだと言える。

次に、このシステムの質的向上を目指すフェーズに入った。この背景にあるのは、①授業はリレー講義のため授業内容は積み上げ式ではなく、②国外の受講生は受信したい授業を選んで単発の受講ができ、③B2レベルに設定された授業のため授業者は過度に日本語を調整せず、④表1・2の通り年々受信大学が増加することに伴いB2に満たないレベルの学生が増加傾向にあったということがある。そこで、筆者はこの授業の内容・レベル・国外の受信状況は変えないという前提に立ち、どのようにこの遠隔配信システムを改変させれば、どの講義においても受講生の安定的な理解を促し、受講生にとって価値のある受講とすることができるのかを考えた。

そこで、2022年度から、授業で話されていること／PPTで説明されていることを、授業者ではないもう一人の人員（当時は筆者）が、Zoomのチャット欄を利用して、講義の中のB1レベルの学生には理解に苦しむであろう部分を「やさしい日本語」（庵編，2020）で言い換えていく実践を始め、その手法を確立していったのである。これが、本稿で主題にする「やさしい日本語チャットサポート」である。

3.2. やさ日チャットサポートの方法

ここでは、やさ日チャットサポートの具体的な方法について説明する。この実践においては、B1レベルの学生の補助を目指しているため、実施者はB1レベルの学生がわかる日本語とはど

のようなものかを知っている必要があると言える。また、講義のスピードにやさ日チャットサポートが追い付かなかったとしても、やさ日チャットサポートは講義に外付けされているものであり、メインとなる講義にストップをかける権利はない。そのため、一定のタイピング能力も必須だと言える。

また、授業内容をやさしい日本語化したチャットが授業者の範疇外で一人歩きしないようにするために、Zoomのチャット欄の保存の設定を、「保存できない」または「ホストと共同ホストのみ」という設定にするようホスト役となる各教員に依頼している。そのため、受講生がチャット欄をコピーして、インターネットブラウザに貼り付けて意味を検索するというような手法がとれない前提に立ち、やさ日チャットサポートを行っている。

なお、やさ日チャットサポートのやさしい日本語化の方法は庵編（2020）と吉開（2020）におけるやさしい日本語の話し言葉・書き言葉で述べられている機能を、やさ日チャットサポートに必要なものに限り参考にしている。

3.2.1. やさ日チャットサポートが発動する対象

まず、やさ日チャットサポートを行う対象となるのは、＜1＞教員の発話、＜2＞PPTの文字・視覚資料である。＜1＞については、具体的には、B1レベルには難しいであろう語彙・文章（長い重文・複文、連体修飾文等）、PPTに文字情報として書かれていない口頭説明、因果関係や経緯などについての長い説明、授業を進行するための発話などである。＜2＞については、漢字の読み方が難解なキーワードや視覚資料（絵巻、伝統芸能の写真、祭の動画など）に関する口頭説明等が含まれる。つまり、授業内容の最初から最後までを詳細にやさしい日本語で言い換えているのではなく、B1レベルでは理解に苦しむであろうと判断した発話や文字情報を対象にしている。そのため、授業後に出来上がったチャットはその授業の全体の台本のように仕上がっていくものではなく、あくまでも補助的にサポートをしているだけの存在であることに留意されたい。

次項よりやさ日チャットサポートの具体的な方法を説明するが、以上の対象に対しどのようなチャットサポートを行っているかについて、語彙・文単位の側面と、内容的な側面に分けて説明する。

3.2.2. 語彙・文単位の理解サポートの方法

まず、語彙・文単位の理解サポートについて説明する。本実践のやさ日チャットサポートでは、B1レベルの学生の補助を目安に、以下の5つの手法を用いてサポートをしている。語彙単位での変換と文章単位での変換があるため分けて説明する。

①語彙単位（1）漢字の打ち込み＋ふりがな

- ・これは、難しい用語の意味の説明がなされているが、漢字の読み方が口頭でしか伝えられず聞き取れているか不安がある場合に、例えばPPT上に「端午の節句・・・」と書かれていれば、「端午（たんご）の節句（せっく）」とふりがなを書き入れるというものである。

②語彙単位（2）難解な語彙／高度な漢字語彙の打ち込み＋（ふりがな）＋意味説明

- ・これは、例えば、授業者が「みなさんの国では夢はどのように説明されていますか？」と

話した場合に、やさ日チャットサポートでは、「夢＝ねているときに見るもの」と書き入れるものである。もしふりがながスライドに振られていなければ、「夢（ゆめ）＝ねているときに見るもの」と書き入れるだろう。

- ・他には「鬼門」というキーワードがふりがな無しにPPT上に出てきて、授業が進んでいった場合に、「鬼門（きもん）＝よくない方向、方角（ほうがく＝東西南北）」のようにチャットに書き入れるなどである。この場合、漢字とふりがなを書き入れるだけでなく、意味の補足をし、さらにその意味の説明となる「方角」がわからないと想定し、「東西南北」まで書き入れてフォローしている。こうすることで、受講生がこのチャットを見た後で、すぐにまた受講姿勢に戻れることを期待している。
- ・また、意味説明をする際には、キーボードに打ち込んで変換する候補として出てくる絵文字の活用もできるだろう。

③語彙単位（３）日本国内の常識の言い換え

- ・これには日本文化学系統の授業の特性が影響しており、授業内では日本古来の元号などが多く使われるため、それを西暦に置き換えて書き入れるというサポートがあてはまる。

④文単位（１）難解な用語が使用されている単文の言い換え

- ・例えば、授業者が「これから神仏習合の展開を説明します。」と話した場合、チャットには「神さまと仏さまが一緒になっていく。どのように一緒になるのか？」と書き入れるなどである。

⑤文単位（２）複雑な複文／重文の、平易な複文／重文への言い換え

- ・例えば、授業者が「民衆が妖怪を恐れることは、それは心の問題だということを証明したんですね。」と話した場合、「人々は妖怪を「こわい」と思っている。井上は「これは心の問題だ」と教えた。」のように書き入れるなどである。

３．２．３．内容理解サポートの方法

次に、内容面については、４つの側面に分かれている。これもB1レベルの日本語を目安に使用することは同様である。

①PPT 1枚の要約

- ・例えば、PPT1枚を使って授業者が「坪内逍遙」「小説神髓」の歴史的な説明を述べていった場合にその内容をまとめて要約し、「坪内逍遙（つぼうちしょうよう）は初めて「小説とは何か」について説明をした。」のように簡潔にまとめて記すのである。

②授業展開の口頭説明

- ・これは授業者がPPTを切り替える際に、よく口頭で述べられるものである。例えば、授業者が授業のイントロダクションが終わり本編へ移る際に、「今日は、面に焦点を当てます。」と述べた場合に、「今日は、面（おもて）について、くわしく話しますよ！」とチャットに書き入れるようなものである。

③教員の説明＋共に授業を受ける仲間としてのリアクション

- ・例えば、授業者が神仏習合についてのイントロダクションをしている場合に、チャットでは教員の説明をやさしく言い換えるだけでなく、「神道（しんとう）に仏教（ぶっきょう）

のお坊さんがお参りする。ほかの宗教に、ほかの宗教の人がお参りする。不思議（ふしぎ）ですね〜。」（太字と下線は強調のため。筆者による。）のように、今この話をどのような姿勢で聞くとよいかという指針となる受講者としての感想も加えて書き入れるということである。こうすることで、聴解力に心配のある学生が、今聞き取れた講義をどのように解釈していいか自分に迷いがあった場合に、「あ、そのように感じていいんだ！私もそう思っていた！」というように自分の解釈に自信が持てるようになったり、「あ〜そういうことを言っていたんだ。」とここまでの解釈を改めてチャットを通して確認することで、その続きの講義にまた身を入れて聞き入る準備ができたりすることを狙っている。

④授業でなされている説明の補足

- ・これはもっと知りたいと思った人のためにURLを送付するなどである。例えば、授業者が「井上円了は東洋大学の創立者でもあります。そして・・・」と授業が進んでいく場合に、「井上円了は東洋大学をつくった。+東洋大学の創立者の公式HPのURL」のようにURLも併せて送る、などである。

3.3. 先行研究

本項ではやさ日チャットサポートと類似の実践が過去にないのか先行研究を確認するが、本稿の実践は授業にもう一名の人員が加わっているという特殊な事例であることから同様の事例は限られる。そこでZoom等を活用したオンライン授業やオンライン交流の場でのチャット活用と言及しているものを対象に取り上げ、やさ日チャットサポートの新規性を確認する。

まず、河内ほか（2021）では、ZoomとGoogle Classroomを併用した日本語教育の授業実践の中で、チャットを授業者が「・学生への指示・学生からの連絡（体調不良の申告、一時退席の許可求め）・学習した文型を使った文作成・学生が知らない語彙・漢字の提示・日本語入力の練習【初級】・活用形の練習【初級】・PDFファイルの共有【初級】」（p.34、下線は筆者による）のために活用していた。この内、「学生が知らない語彙・漢字の提示」が、3.2.2.で述べた語彙単位の変換に類似するものだと考えられる。

また、オンライン交流の場では、村田（2021）、中井ほか（2022）、守谷・長野（2021）が挙げられる。村田（2021）ではボランティア学生による留学生たちの学習支援とオンラインサポートの場における、留学生とのZoomを通じたオンライン交流の中でチャット使用がなされている。そこでボランティアの日本人学生は、交流相手の理解を助けるために、チャットを使用して「漢字、ひらがな、英語を見せるサポートを行った。」（p.25）と述べられている。これは、河内ほか（2021）と同様に、語彙・漢字の補助のためにチャットを使用していると言え、3.2.2.で述べた語彙単位の変換に類似するものだと考えられる。また、中井ほか（2022）は日本の日本語教育を学ぶ大学生と中国の日本語学習者の大学生によるオンラインの日本語交流の実践において、その実践前に、日本の学生には「日本語が通じない場合はZoomチャットで筆談する」（p.同）と指示していたことが述べられている。実際にどのようなことが行われたかの詳細は定かではないが、日本の学生がチャットを活用して中国の学生の日本語理解の補助をしていると読み取れば、3.2.3.で述べた内容理解サポートに類似していると考えられる。また、守谷・長野（2021）では「オンラインにほんごカフェ」における留学生と、（やさしい日本語を学んだ）日本人学生スタッフの交流活動において、オンラインでの居心地のよい場づくりを目的

としたチャット使用が行われており、「チャットによる文字情報の提供」(p.79)が行われ、参加する留学生のための言語的支援が行われている。その感想には、「初級の人メインの時にみんな話してる内容が理解できるようにチャットとかでもひたすら内容を送りまくる(中略)わかんないなと思った時に何となく、今こういう話で笑ってんだとか、こういう単語が出てきたんだっていうのを把握してもらえる」(p.79)と述べられていることから、やさしい日本語を学んだ日本人学生による会話内容の理解の補助がなされていることがわかり、これも3.2.3.で述べた内容理解サポートに類似するものだと言えるだろう。

以上からわかるのは、やさ日チャットサポートの方法には先行研究では各側面については価値が見出されているということである。しかし、やさ日チャットサポートのようにそれらを総合して用いられているものは管見の限り無いのである。したがって、語彙・文単位の理解サポートと内容理解サポートの両面を兼ね備えたやさ日チャットサポートの有効性を改めて確認していく必要がある。そこで、まずはやさ日チャットサポートがなされる授業の受講生から、やさ日チャットサポートがどのように評価されているかその有効性を確かめていく。

4. やさ日チャットサポートに対する受講生の評価

本節ではやさ日チャットサポートがなされる授業を受講する国外の受講生からのやさ日チャットサポートに対する評価を明らかにしていく。

4.1. 調査概要

調査は2022年度春～夏学期に、国外からZoomで参加する受講生を対象にアンケート調査を行った。その調査には、中国からでも回答が可能なMicrosoft Formsを使用した。調査の日程と授業回、分野は表3の通りである。

表3 受講生アンケート実施日と授業分野

日程	授業日	分野
2022年4月26日	第3回	伝統芸能
2022年5月31日	第7回	近代文学
2022年6月7日	第8回	民俗学
2022年6月14日	第9回	仏教文化

国外の受講生は、一部の大学が在籍大学の授業の一環としての受講をするが、それ以外は、自分の好きな回を選んで受講しており、回によって参加する学生が異なる。そのため、多様な学生からの声を集めるために、授業後にアンケート回答を促せる時間が残った

計4回の授業後に、チャット欄に回答用のURLを送付しアンケート回答を求めた。アンケートの設問には、大学名・自分の大学での学年・日本語レベルなどの属性、やさ日チャットサポートを見ていたか、やさ日チャットサポートを見ていなければその理由等が含まれる。

4.2. 調査結果

国外の受講生の調査回答者数は、4回合わせて累計71名(回答率82.5%)であり、その内訳は東南大学2年生の54人、タマサート大学1～3年生の4人、ランシット大学2～4年生の11人、泰日工業大学2・3年生の2人であった。ここからはやさ日チャットサポートに対する受講生からの評価に入る前に、前提となる調査結果について見てみよう。

まず、この配信授業の受信理由については複数回答が可能な形式で、「日本の授業を受けてみたいと思ったから」は78.87%、「授業テーマに興味があったから」も同様に78.87%、「留学に行

く前に、自分の日本語能力で日本の授業が受けられるのか試してみたかったから」が21.13%、その他が2.82%となった。つまり、日本国内で行われている授業／授業テーマへの興味関心の他に、留学に行く前の力試しだと位置づけられていることがわかった。

次に、「授業の時にやさ日チャットサポートを見ていたか。」に対する回答は、中国・タイからの受講生は「はい、見ました。」と、全体から1名を除く70名（98.59%）受講生が見ていたことがわかった。「いいえ、見ませんでした。」と回答した受講生の理由には「日本語能力に心配がない」というもので、自分の日本語能力への自信が影響したものであった。次に、「やさ日チャットサポートは皆さんの学習の役に立ちましたか。」に対して「とても役に立った・役に立った・どちらでもない・あまり役に立たなかった・役に立たなかった」の5択で回答を求めたところ、中国・タイの受講生70名のうち、95%が「とても役に立った」と「役に立った」と回答し、やさ日チャットサポートを肯定的に評価していた。

4.3. 分析方法・結果

分析の対象は、やさ日チャットサポートを役に立ったと肯定的に評価した受講生が記述した理由であるが、授業内容や授業者に対する評価がなされていたもの、そしてやさ日チャットサポートに対する「とてもいいです。」のような肯定的評価のみの記述にとどまっているものを除外したところ、36の回答が分析対象となった。分析方法には、先行研究が少ない分野で探索的に研究を行う場合に有効な方法であるとされているオープンコーディング（日高，2019）を援用し、その回答に対し、コードを付し、そのコードをカテゴリに分類した。分析の結果、表4の通り、分析対象となった回答36から、得られたコードは7となり、そこから5のカテゴリが得られた。以下から、カテゴリを本文に記述する際には【 】を使用し、コードの場合は< >、回答原文を使用する場合は「 」を使用して表す。紙幅の都合上、多くのコードが集中したものを中心に説明していく。

表4 やさ日チャットサポートが役に立った理由分析結果

カテゴリ（データ数）	コード（データ数）
足りない日本語能力の補助（15）	聴解能力不足の補助（7）
	未習語彙の理解の補助（7）
	未習漢字の理解の補助（1）
講義内容理解の補助（9）	専門講義の理解の補助（9）
講義内容理解の深化（8）	講義内容のさらなる理解の補助（8）
機器などの不具合時の補助（3）	機器などの原因による内容理解不足の補助（3）
自然な日本語の学びの補助（1）	「本物の日本語」の学びの助け（1）

表4からわかるように、データ数が15と最も集中したのは、【足りない日本語能力の補助】であり、これから説明する。まず、「日本語を聞き取れないとき、チャットを読んで、内容が分かります。（タイ）」、「私は日本語を聞くのがあまり得意じゃないから、チャットの説明を読んで分かります。本当に役に立ちました。（タイ）」等の7のデータから、聴解の助けになったことがわかり、<聴解能力不足の補助>が得られた。<聴解能力不足の補助>は、聞き取れない対象が3.2.2.の語彙・文単位の側面なのか、3.2.3.の内容そのものなのかは判別できないが、受講

生には留学未経験者が多く、日本語聴解に不慣れな学生が多いことが起因していると考えられる。また、「授業で話している名詞をよく理解できないことがあります。(中国)」、「いくつかの専門名詞の解釈はとても良いと思います。(中国)」等の7のデータから、語彙の側面での理解の助けとなっていたことがわかり、＜未習語彙の理解の補助＞が得られた。これは3.2.2.の語彙・文単位の理解サポートの側面に対する評価だと言えよう。この授業では一般の日本語学習の場では扱われないような日本文化学分野の専門用語が頻出することが起因していると考えられる。それに加え＜未習漢字の理解の補助＞が得られ、これを併せて、【足りない日本語能力の補助】が得られたのである。

次に多くの9のデータが含まれたのは、【講義内容理解の補助】で、これについて説明する。「チャットの日本語補助があれば、授業の内容を理解しやすい(中国)」や「先生の言うことが私にはわからないところがあるかもしれません。チャット欄の説明がはっきりしていてわかりやすいです。(中国)」等の9のデータから、講義内容の理解の助けとなっていたことがわかり、＜専門講義の理解の補助＞が得られ、【講義内容理解の補助】が得られたのである。これは3.2.3.の内容理解サポートの側面の評価だと言える。

また、次に多くのコードが含まれたのは【講義内容理解の深化】である。これには「先生が教えてくれた知識をもっと吸収するのに役立ちます(中国)」、「チャットの説明を通じて、授業の内容をもっと理解することができます。(中国)」(太字下線は筆者による)等の8のデータから、＜講義内容のさらなる理解の補助＞が得られた。これも3.2.3.の内容理解サポートの側面の評価だと言えるが、やさ日チャットサポートがなくても講義にはついていけるが、やさ日チャットサポートがあることによってその理解をさらに深めることができていると考えられることから、【講義内容理解の深化】が得られたのである。これは、3.3.で確認した先行研究でも述べられていない点であり、やさ日チャットサポート独自の有効性が見出されたと言える。

また、遠隔配信上、配信側と受信側のインターネット環境が講義の聞き取りやすさに影響するため「時々先生の声が聞こえませんから。(タイ)」等の3のデータから、＜機器などの原因による内容理解不足の補助＞が得られ、ここから【機器などの不具合時の補助】が得られた。最後に、国外の学生だからこそ「いくつかの本場の言語表現はこのような方法で学ぶことができる。(中国)」という1つの回答から＜「本物の日本語」の学びの助け＞が得られ、【自然な日本語の学びの補助】というカテゴリも得られ、留学前の段階にある学生にとっては通常では得られない貴重な学びだとも言えよう。しかしこれらはあてはまるデータ数も少なく、遠隔配信上の補助と、日本国内の授業に参加すれば得られる、この配信の周辺的な作用だと考えられる。

以上から、国外の受講生からは、やさ日チャットサポートに対して【足りない日本語能力の補助】【講義内容理解の補助】【講義内容理解の深化】を中心に有効性が認められていることが明らかになった。本節では、先行研究で見出されていたチャット活用の有効性を包括しつつ、【講義内容理解の深化】が見出されたことでさらに有効性の強化がなされていると確認することができた。

5. やさ日チャットサポートの対象となる授業の授業者が抱く不安

本節では、やさ日チャットサポートの対象となる授業を行っている授業者を対象に、やさ日チャットサポートが行われることに對し不安や懸念事項がないか明らかにしていく。

5.1. 調査概要と結果

2023年度春～夏学期の授業者10人を対象に、2023年8月2日～16日を調査期間とし、Microsoft Formsを使用したアンケートへの回答協力を依頼した。調査における質問は、やさ日チャットサポートに対する心配はあったかどうか、やさ日チャットサポートがあることによる恩恵、やさ日チャットサポートの改善すべき点についてである。なお、2023年度春～夏学期は、センター留学生にも各机に設置されているPCや自分のデバイスを使ってZoomに入れば、やさ日チャットサポートを見ることができる環境を作り、やさ日チャットサポートが必要な学生には見る権利を与えていたことに留意されたい。

調査の回答は7人（回答率70%）から得られた。まず、やさ日チャットサポートに対する懸念事項の有無について質問したところ、7人全員が「いいえ」と回答し、懸念事項は無いということがわかった。アンケートでは、不安がある場合にはそれについての回答を、不安がない場合には、不安感を抱かない理由について回答を求めているため、ここからは、授業者はなぜ不安感を抱かないのかその理由に関する記述回答に焦点を当て、分析を試みる。

5.2. 分析方法

心配にならない理由について述べた記述回答を、比較的小規模データへの使用が想定された質的分析方法であるSCAT（大谷，2019）を用いて質的分析を行った結果について述べる。分析手順は、次の通りである。まず対象となる7人分の記述回答を抽出し、まとまりごとにセグメント化した。それをSCATのExcelフォームを利用し＜1＞着目すべき語句の書き出し、＜2＞それを言い換える、＜3＞テキスト外の語句に言い換える、＜4＞テーマ・構成概念の記入をする、という4ステップのコーディング手続きを踏んだ。これらの分析の過程で得た疑問や追求すべき課題を＜5＞疑問・課題に記入した。その後、＜4＞で得たテーマ・構成概念をつなぎあわせて再文脈化したストーリー・ラインを作成した。その後理論記述を行う工程もあるが、大谷（2008）が「小規模データに対して適用するときは、主に対象についての記述的な理解を得ることを目的とすべきであって、その点では、ストーリー・ラインの記述を目的とし、理論記述は不要であると考えても構わない」（p.32）と述べていることから、ここではストーリー・ラインの記述を目的としていく。なお、分析の例は以下である。

回答者	番号	語り	第一段階・ 抜き出し	第二段階・ 言い換え	第三段階・ テキスト外の概念	第四段階・ テーマ構成概念
B	2	短い感想が加えられることでリズムが生まれているようにも感じた。	短い感想・加えられる・リズムが生まれている	感想挿入による授業リズムへの好影響	受講する仲間としての感想の付加	受講生としての感想挿入による授業への好影響

5.3. 分析結果

ここからは、第四段階で得られたテーマ・構成概念は【 】を使用し、回答原文は「 」を使用して表す。まず、分析の結果、テーマ・構成概念は【やさ日チャットサポートへの厚い信任】が2、【やさしい日本語化による誤用の無さに対する高評価】が2、その他はどれも1ずつ、【やさ日チャットサポートの即時性に伴う苦慮への温情】【授業者の責任外となる日本語能

力補助サポートの必要性】【やさ日チャットサポートによる受講生の理解度向上への期待による心配の皆無】【受講生からのいい反応によって認知する授業理解への貢献の実感】【受講生としての感想挿入による授業への好影響】【心配の対象にはならない薄い存在感】【注目すべき教壇揭示物を逃す可能性への懸念】が得られた。これらを紡ぎ合わせたストーリー・ラインは以下の通りである。

やさ日チャットサポートが行われる講義の授業者は【即時対応必須のやさ日チャットサポートの即時性に伴う苦慮への温情】があるが、【授業者の責任外となる日本語能力補助サポートの必要性】を感じている。授業者にとっては【受講生からのいい反応によって認知する授業理解への貢献の実感】があり、【やさ日チャットサポートによる受講生の理解度向上への期待による心配の皆無】につながっている。【受講生としての感想挿入による授業への好影響】を感じているだけでなく、【やさしい日本語化による誤用の無さに対する高評価】をし、【やさ日チャットサポートへの厚い信任】がある。授業者としてやさ日チャットサポートは【心配の対象にはならない薄い存在感】であるが、学生が【注目すべき教壇揭示物を逃す可能性への危惧】はある。

このストーリー・ラインより、不安感を抱かない理由について明らかになっただけでなく、授業者からのやさ日チャットサポートに対する評価も明らかになったと言えよう。ここからは、ストーリー・ラインを実際の回答を用いながら説明するが、紙幅の都合上、不安感を抱かない理由と評価を中心に述べる。

やさ日チャットサポートに対して授業者Eは「留学生たちに正確に内容が伝わっていることを、授業時の様子やコメントシートでの記述からうかがえましたから。」(E1)と回答しており、学生の授業理解へ貢献していることの認知による安心感が述べられ、【受講生からのいい反応によって認知する授業理解への貢献の実感】が得られた。また、授業者Cは「あったほうが理解度は高まると思うので、心配になるということはありません。」(C2)と回答し、学生の理解度向上への貢献を理由に不安に感じる必要の無さを示し、【やさ日チャットサポートによる受講生の理解度向上への期待による心配の皆無】が得られた。これらがやさ日チャットサポートに対して不安感を抱かない理由だと言えよう。

また、やさ日チャットサポートに対する評価としては、手法の一つである3.2.3.で説明した一受講生としてのリアクション挿入に対し、「何度かサポートをしていただく中、授業後に落ち着いてチャットをすべて読ませていただく機会があったが、＜中略＞短い感想が加えられることでリズムが生まれているようにも感じた。」(B2)とこの手法があることによる授業への恩恵が語られ、【受講生としての感想挿入による授業への好影響】が得られた。その評価に加え、「誤って伝えられている内容は皆無である」(B1)と「授業中にやさしい日本語チャットをちらった見たりして、変換が適切で、わかりやすかったと思いましたので、心配になりませんでした。(後略)」(F1)のように、やさしい日本語化をする際の解釈のミスはないと捉えられていることから【やさしい日本語化による誤用の無さに対する高評価】が得られた。最後に評価について特筆すべきものは、「＜前略＞ただ、学生たちが、スライドではなく、チャットばかり見ていると、写真などのビジュアル資料を見逃してしまうのではないかという心配はありました。しかし、実際にそういう学生がいたとどうかわかりません。」(F2)から、実際にそういう

学生を確認したわけではないが、授業者は学生の視点がチャットに集中した場合の不都合を指摘し、【注目すべき教壇掲示物を逃す可能性への懸念】が得られた。

以上から、授業者はやさ日チャットサポートに対して、学生の視点が授業者に集まらなくなる可能性への危惧はしているものの、総じてやさ日チャットサポートの有用性を評価していることが明らかになったと言えよう。4.ではやさ日チャットサポートの受け手である受講生からの肯定的評価を確認することができ、本節ではやさ日チャットサポートの対象となる授業を運営する授業者からもやさ日チャットサポートの有用性が評価されたという点を鑑みれば、このやさ日チャットサポートを応用して、他の現場で用いていくには十分な価値があるものだと言えよう。

6. やさ日チャットサポートの困難点

やさ日チャットサポートを遂行するには、①3.2.で述べたやさ日チャットサポートの手法を知ることに加えて、②一定のタイピング能力、③易しさの判断をするための一定の日本語教育学関連の知識が必要になる。やさ日チャットサポートを実践して開発してきた筆者は、国内外の複数の教育機関で専任としての日本語教育歴が約10年あり、やさ日チャットサポートを実施する際には経験の蓄積で自動的に補完している技術があるかもしれない、上記の①②③を兼ね備えているだけでは実施が困難な可能性がある。そこで、①②③を兼ね備えた日本語教師“初任者”に、やさ日チャットサポートの手法を伝授し、実際に実施してもらうことにより、やさ日チャットサポートの困難点が浮かび上がりやすいと考えた。本節では、6.1.でやさ日チャットサポートの開発者である筆者によりやさ日チャットサポート方法を伝授された人員と、伝授した内容について説明し、6.2.でその実施者に対する調査の概要を説明する。そして、6.3.でやさ日チャットサポートの困難点を明らかにするための分析方法を述べ、6.4.で分析結果を説明する。

6.1. やさ日チャットサポートの伝授対象者とその伝授概要

①②③を兼ね備えた日本語教師“初任者”を調査対象としていくために、2023年度秋～冬学期に配属されたこの授業の遠隔配信補助業務を担うTA 2名（XとY）に対し、調査の協力確認をし、研究参加同意書の説明とサインの確認をした上で、承認を得た。このXとYは、どちらも日本語教育学系統の博士前期課程2年生で、日本語教師として専任で働いた経験は無く、国内外の大学や高校でのTA経験が約2年、国内外の大学での非常勤講師経験が約半年ある学生であり、2人に確認したところ一定のタイピング能力を持っていると判断ができ、依頼するにふさわしいと考えたのである。

XとYには2023年10月10日に行われた授業初回に、教室内オリエンテーションが行われている裏で、筆者が遠隔配信補助業務について説明し、やさ日チャットサポートの手法については3.2.と同様の説明資料を配布し、説明をした。その初回授業は講義ではないものの、練習を兼ねてやさ日チャットサポートの試行を約10分程度行った。

6.2. 調査概要

XとYがやさ日チャットサポートを始めたのは、講義が本格的に始まる授業第2回（2023年10月17日）からである。授業は約70分行われ、その後約20分で質疑応答と教室内の受講生の振

り返りシートの記入時間となる。そこで、授業時間の約70分を前半部分と後半部分に分け、XとYは約30分のやさ日チャットサポートを交代で行った。

調査は、表5で示した通り2023年10月17日～2023年12月12日の間で毎週（計8回）行われたやさ日チャットサポート実践の後に、Googleスプレッドシートを利用して行った。調査項目は、今日のやさ日チャットサポートへの自己評価5点満点と、その理由、前回に比べて成長したところ、やさ日チャットサポートの難しかった点である。このGoogleスプレッドシートは筆者を含む3名で閲覧・編集可能にし、自身が感じた困難点や達成度を、全員で確認しあえるようにした。そうすることで、互いに励ましあいながら、自身の成長の確認もでき、各自のモチベーションを保つこともできるだろうと考えた。

表5 XとYのやさ日チャットサポート実践回

実践回	日程	分野
1	2023年10月17日	大衆文化
2	2023年10月24日	民俗学
3	2023年10月31日	近代文学
4	2023年11月7日	近代文学
5	2023年11月14日	大衆文化
6	2023年11月28日	古典文学
7	2023年12月5日	民俗学
8	2023年12月12日	仏教文化

6.3. 分析方法

Googleスプレッドシートに8週にわたり書かれた記録を見ると、やさ日チャットサポートの困難点は「難しかった点」について回答する設問以外にも散見された。そのため、分析ではまず、各自が困難だと感じ記述したものを抽出し、通し番号を振った。通し番号は例えば8X26であれば、実践8回目にXが感じた困難点であり、それがXの困難点の累計26個目だということである。その後、オープンコーディング（日高，2019）を援用し、抽出したものにコードを付与し、類似するコードを集約し、それにカテゴリ名を付与した。そして、類似する中カテゴリを集約し、大カテゴリに分類し、カテゴリ名を付与した。これ以降、大カテゴリを【 】, 中カテゴリを<>, コードを< >, 回答原文を「」で示す。

6.4. 分析結果

まず、分析の結果、Xは23、Yは14、計37の困難点のコードが得られ、そこから大カテゴリが6得られた。すると、その大カテゴリから、やさ日チャットサポートでは、思考と作業で、複数の段階を踏んでいく過程と、段階ごとの難しさがあることがわかった。まずはそれを図3に示す。

まず、やさ日チャットサポートでは、授業内容を理解する段階から始まるのは言うまでもない。その際には、いま授業者は何のためにこの説明をしていて、スライドが移る際にはどう展開していくのか等の理解も必要になる。次に、B1レベルにとっては何が難しいのかを考え、変換する対象の選定を行い、選んだ変換対象をどのような手法を用いて変換するのかを選定する。その後、B1レベルの学生がわかる日本語でそれを表現するにはどうしたらいいのか考え、最適だと考えたものをタイピングし、送信するのである。もちろん必ずこの順序で進むわけではなく、【変換する方法の選定】と【B1レベルへの変換の思案】などが並行して行われる場合もあるだろうが、基本的な流れはこのように位置づけることができた。そして、これらが講義の進行に合わせて次々と変換する対象が表れてきて、その度に発動し、行程が重なっていくのであ

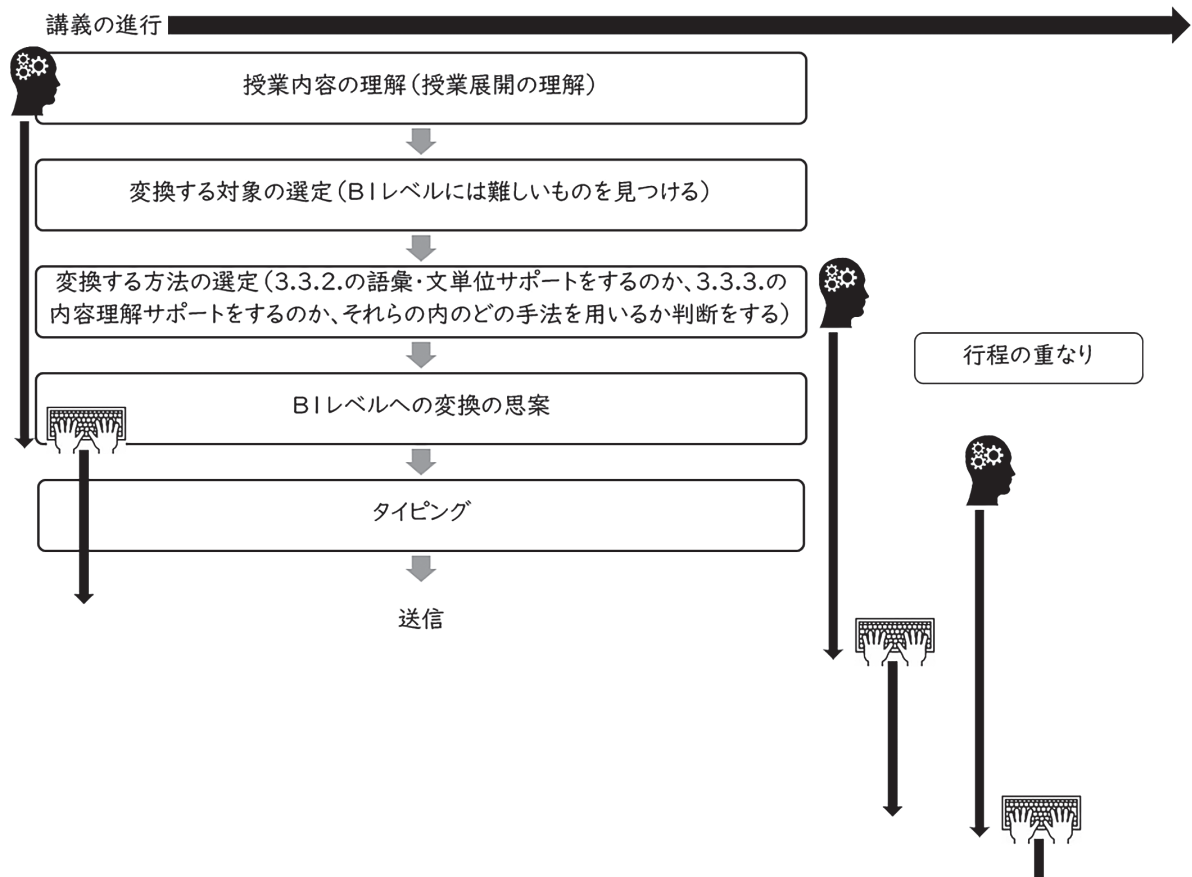


図3 大カテゴリを利用したやさ日チャットサポートの思考と作業段階の図式化

る。調査では、これらの各段階の難しさが語られたのである。

分析の結果、表6に示した通り、困難点の大カテゴリ【授業内容の理解】では1つの中カテゴリ、【変換する対象の選定】では3の中カテゴリ、【変換する方法の選定】では1の中カテゴリ、【B1レベルへの変換の思案】では3の中カテゴリ、【タイピング】では1の中カテゴリが含まれ、最後に【行程の重なり】では、以上すべての大カテゴリが中カテゴリとして含まれた。ここから順番に説明していくが、紙幅の都合上、中カテゴリの内、実際のデータを取り上げて説明するコードは一つに絞る。

まず、【授業内容の理解】という大カテゴリである。仏教文化の講義では、日本語教育学を専門とするTAにとっては専門外のことであり、「知識がないとやさしく言い換えられないものが多かった。」(8X20)と困難点が述べられた。ここから＜専門的な知識を必要とする情報の理解＞が得られ、他の一つのコードも同様のものが得られ、これらより＜情報理解＞が得られ、【授業内容の理解】という大カテゴリとなった。

次は【変換する対象の選定】という大カテゴリである。1回目の実践で、「漢字のふりがななどに配慮できたか不安。」(1X2)と授業のスライドに出てくる数々の漢字に対して必要なアプローチができていたか悩むことから＜ふりがなを必要とする漢字の選択＞が得られた。この他に＜漢字の扱い方＞というコードが得られ、これらから＜漢字の取捨選択＞が得られた。次に、「学生にとって必要だと思われる情報をすくいあげるのが難しかったです。」(1Y1)や「どこまで拾えばいいかわからなかった。」(1X1)などから＜変換する必要がある情報の取捨選択＞が

表6 やさ日チャットサポート実施者X, Yの困難点の分類

段階 ／大カテゴリ	中カテゴリ	困難点のコード（コード番号）	解決	授業特性に よる影響	
授業内容の 理解	情報理解	専門的な知識を必要とする情報の理解（8X20, 8X22）		○	
	漢字の取捨選択	ふりがなを必要とする漢字の選択（1X2, 2X8, 8Y13）	5X		
変換する対象 の選定			漢字の扱い方（1X3）	5X, 3Y	
	情報の取捨選択	変換する必要がある情報の取捨選択（1X1, 2X7, 1Y1, 6X15）	2X, 4X, 5X, 8X, 2Y, 3Y, 7Y		
			教室内の授業者と受講生のやり取りの拾得（5X14）	5X, 7Y	○
			授業者による受講生への問いかけの拾得（2X11）	8Y	○
	変換する方法 の選定	口頭のみ情報の 取捨選択	授業者による口頭説明の拾得（1X4）		
視覚情報の無い口頭説明の拾得（4X12）					
語彙・文単位の変換 サポートか内容理解 サポートかの選択		要約を実施するかの判断（1X5）	2X, 6X		
			高度な内容の変換方法の選択（6X16）	4X, 6X	○
			自然と使われた専門的な用語の説明（7X17, 8Y14）	5X, 6X, 8Y	○
B1レベルへの 変換の思案	B1レベルに適した 語彙変換	カタカナ用語のアルファベットの補足（1Y3）	5X		
		オンライン検索が必要になった際のスピード保持（7X18）	5X		
	B1レベルに適した 内容説明	絶妙な易しさをつく内容説明（2X6）	2X, 3X, 5X, 6X		
			授業者の口頭説明を言い換える際の主体選択の判断（1Y4）	5X	
タイピング	タイピングミス	焦りによるタイピングミス（2X9, 2Y5）	7X, 3Y		
行程の重なり	以上の大カテゴリの すべて	計13（2X10, 2X11, 4X13, 8X19, 8X21, 1Y2, 2Y6, 4Y7, 4Y8, 5Y9, 5Y10, 6Y11, 7Y12,）			

得られた。これは実践1回目・2回目に合わせて3現れたコードで、実践を初めて間もない頃を感じる困難点だということも言える。この他に＜教室内の授業者と受講生のやり取りの拾得＞と＜授業者による受講生への問いかけの拾得＞というコードも得られ、これらを合わせて＜情報の取捨選択＞が得られたのである。また、「スライドにない話を拾っていくのは難しかった。」(4X12)と、講義ではスライドからわかる視覚的な情報以外に、授業者がその場で補って説明する情報をどの程度拾っていくのかに悩むことから＜視覚情報の無い授業者による口頭説明の拾得＞が得られ、＜口頭のみの方の情報の取捨選択＞が得られた。これらの3つの中カテゴリから、【変換する対象の選定】という大カテゴリが得られた。

次は【変換する方法の選定】という大カテゴリである。1回目の実践で、「短文ではあるけど内容とかはまとめるのか」(1X5)と、授業者の短文による説明やスライドに表示されている説明の解釈はできているだろうと判断する場合に、要約してサポートするかどうかの判断に悩み、＜要約を実施するかの判断＞が得られた。この他に＜高度な内容の変換方法の選択＞と合わせて＜語彙・文単位の変換サポートか内容理解サポートかの選択＞が得られ、【変換する方法の選定】という大カテゴリが得られた。

次は【B1レベルへの変換の思案】である。6回目の実践では、「説明されない、ちょっと日常で使わない語彙の説明。」(7X17)と日本文化学系統の授業であるからこそ出てくる用語を授業者がフォローがなく使用した場合に、それをB1レベルを対象にどのように言い換えたいのか悩み、＜自然と使われた専門的な用語の説明＞が得られた。その他に＜カタカナ用語のアルファベットの補足＞と＜オンライン検索が必要になった際のスピード保持＞をあわせて、＜B1レベルに適した語彙変換＞が得られた。また、「どこまで内容を簡単にするのがいいのか？簡単にしすぎていないか？」(2X6)と言い換えの難易度を設定することに悩んだことから、＜絶妙な易しさをつくる内容説明＞が得られ、ここから＜B1レベルに適した内容説明＞が得られた。また、「先生が「～だと思えます」とおっしゃられたことを、「～だと思っています」と書くか、「先生は、～と思っているそうです」と書くか、視点をどこに合わせるかわからなくなるときがありました。」(1Y4)と、言い換え方法を考えた際にどこの視点に立って文を構成したらいいか悩むということから＜文の構造方法の思案＞が得られた。これらの中カテゴリから、【B1レベルへの変換の思案】が得られたのである。

次は、【タイピング】である。「焦りからか、打ち間違いや、不完全な状態でチャットに送信してしまうことが何回もありました。」(2Y5)から＜焦りによるタイピングミス＞が得られた。もう一つのコードも2回目に現れたことから、これは実践経験の少ない回によく現れる可能性があるだろう。このコードから＜タイピングミス＞が得られ、【タイピング】という大カテゴリが得られたのである。

そして最後が【行程の重なり】である。これには、計12のコードが含まれ、それらから中カテゴリが5つ得られたが、その中カテゴリは以上で説明した同様の大きなカテゴリとなった。例えば、「専門用語や、熟語の意味の説明に時間をかけている間に授業が進むと、自分自身が授業内容に追いつかないことがあります。先生のお話を聞きこぼしているところがあると、チャット変換できなくなる説明がありました。」(5Y10、太字下線は筆者による)のように、行程が重なっていくことにより、今聞き取って理解すべき講義の理解ができなくなることから、＜今進んでいる講義内容の拾得＞が得られ、行程が重なることにより＜授業内容の理解＞に困難点を

覚えたのである。ほかには、「pptの漢字にふりがながなく、ふりがなをつけるサポートをしている間に、先生が口頭でおっしゃった内容でサポートが必要な箇所が重なることが多々ありました。どちらを優先させるべきかを瞬時に判断するのは難しいです。」(6Y11)のように、行程が重なることにより<変換する必要がある情報の取捨選択>に困難を感じ、<変換する対象の選定>という中カテゴリが得られたのである。このように、やさ日チャットサポートの思考と作業段階は、授業内容のある部分を対象にやさ日化していくことに困難さがあるだけでなく、授業が進み変換対象が現れる度に、思考と作業の行程が重なっていくことが困難点にもなるということがわかった。この【行程の重なり】には、<授業内容の理解>が2つ、<変換する対象の選定>が5つ、<変換する方法の選定>が2つ、<B1レベルへの変換の思案>が2つ、<タイピング>が2つ、計13含まれた。

これらより、やさ日チャットサポートは思考と作業の各段階でやさ日チャットサポート実施者の困難点があることが明らかになった。つまり、①3.2.で述べたやさ日チャットサポートの手法を知ることに加えて、②一定のタイピング能力、③易しさの判断をするための一定の日本語教育学関連の知識を持つ人は、やさ日チャットサポートの遂行は可能だが、以上の6の大カテゴリの困難を抱える可能性があるということがわかったと言える。

7. 考察：やさ日チャットサポートの応用可能性

6を通して、実際にやさ日チャットサポートを実施する際の困難を抱える可能性があるポイントを確認することができた。これらは、実際に現場での活用ができるかどうかの判断材料になるであろうし、活用を決めた場合には、困難に陥った場合の対応方法をあらかじめ考えておく準備ができるであろう。しかし、ここで考えたいのは、果たしてこの困難点は実践を重ねるごとに解決する可能性があるものなのかどうかである。解決しない問題があるならば、それを知っておくことにより、ある意味では限界としてその変換は諦める決断もでき、もっと気軽にこの手法を取り入れる後押しにもなるだろう。本節では、6.4.で述べた困難点の中に、実践を重ねるごとに解決の可能性があると言えるものを、XとYの日々の自己評価に関する記述から検討していく。紙幅の都合上、表6の「解決」の列に解決しているか検討した結果をすでに記してある。

表6の「解決」の列からわかるように、ほとんどの問題点は実践を重ねるごとに解決されていく可能性を秘めている。たとえば、【変換する対象の選定】における<変換する必要がある情報の取捨選択>は困難点として得られたコードの中で最多であったが、2回目の実践で「前はすべての発話を拾おうとしてしまいましたが、今回は拾うかどうか、選ぶ過程が生まれました。」(2Y)と、慎重にやさ日化する情報を選択することができるようになっていた。4回目の実践では「今はなしていることがスライドにあるかどうかを考えながら変換することができた。」(4X)と授業者の口頭説明とスライドから得られる視覚情報を加味して情報を選び、その上で変換の思考過程に移っている。つまりこれは回を重ねるごとに、実践者の中で自分なりの解決方法を見出すことができるものだと言えるだろう。また、同じく【変換する対象の選定】における<ふりがなを必要とする漢字の選択>も次に多くの困難点として得られたものだが、「少し簡単な言葉への変換、読み仮名の付け方、説明の書き方などにもなれてきたと感じた。」(5X)のように、5回目の実践では漢字の読み仮名をどのように扱っていくか検討し、読み仮名を

振っていく作業には慣れが生じていることがわかる。つまりこれも、回を重ねるごとに解決できるものと言えるだろう。

では、XとYが8回の実践を経ても、困難点のまま残していると考えられるものはどれにあたるであろうか。表6の「解決」の列を空欄にしたものがそれにあたる。それは、【授業内容の理解】の＜専門的な知識を必要とする情報の理解＞と、【変換する対象の選定】の≪口頭のみ情報の取捨選択≫、そして【行程の重なり】であるが、やさ日チャットサポートの応用可能性を考えていくためには、残された困難点の内、日本文化学系統の専門的な授業であったことが影響しているものと、そうでないものを分けて考える必要があるだろう。そこで表6の「授業特性による影響」の列に示したことが重要になる。このやさ日チャットサポートを別の場で応用していくことを考えれば、＜専門的な知識を必要とする情報の理解＞は、今回のやさ日チャットサポートの場の特性が影響しており、この場に限った難しさだと言える。そうすると、残された【変換する対象の選定】の≪口頭のみ情報の取捨選択≫と【行程の重なり】が最重要課題ということになるだろう。これらがやさ日チャットサポートを色々な場で実践していく際には、どの場でも困難点として浮上する課題であると言える。

これらが難しいとあらかじめ認知しておけば事前に方策を考えておくこともできるであろうし、直面した場合にも「自分のせいだ」「自分のやさ日チャットサポートのレベルがまだまだ低いせいだ」と捉える必要はないということになる。本稿を通じて、誰にとっても「やさしい」世界を創り出そうと動く日本語教師が増えていくことを願う。

8. 結論

本稿では、日本文化学系統の授業の遠隔配信事業で筆者が考案したやさ日チャットサポートの応用可能性を明らかにするために、3つの方面から探っていった。まず、やさ日チャットサポートが並行して行われる授業を、遠隔で受講している受講生から、【足りない日本語能力の補助】【講義内容理解の補助】【講義内容理解の深化】としてやさ日チャットサポートが有効であると意味づけられていることが明らかになり、特に【講義内容理解の深化】はやさ日チャットサポートに限って見られた有効性だということも分かった。次にやさ日チャットサポートの対象となる授業の授業者は、学生の視点が授業者に集まらなくなる可能性への危惧はしているものの、総じてやさ日チャットサポートの有用性を評価していることが明らかになった。そして、やさ日チャットサポートの実践者としての困難点は、やさ日チャットサポートの思考と作業段階のいずれの段階にも困難点は発生するものの、実践を重ねれば解決されていく事項が多かったことがわかったが、一方で【変換する対象の選定】の≪口頭のみ情報の取捨選択≫と【行程の重なり】が最重要課題となることが明らかになった。これについてはやさ日チャットサポート開発者の筆者としては、以上のどちらも解決策は持っている。【変換する対象の選定】の≪口頭のみ情報の取捨選択≫に対しては、授業者の本筋からは外れたものとして変換対象とみなさない、もしくは、授業者の発話が終わった後に内容理解サポートとして要約をする、このどちらかの方法を取るとよいと考えるし、また、【行程の重なり】は、語彙・文単位の変換サポートより、内容理解サポートの比重を重くすることによって解決されることが多いと考える。つまり、やさ日チャットサポートの困難点は解決の余地があると言っても過言ではない。しかし、本稿から得られた、やさ日チャットサポートの困難点を事前に認知しておくことで、実践

の場でやさ日チャットサポートを応用していく場合の注意点として心構えができ、前向きにやさ日チャットサポート実践を他の場で取り入れる判断ができるのではないだろうか。筆者も、実際に日本人市民とのオンライン交流がなされた授業実践の場で活用したことがある。このように他の場で広く活用されていくことを期待する。

最後に改めて確認しておくが、やさ日チャットサポートは、その場で行われるやりとりのすべてを言い換えていくものではなく、あくまでも補助的な存在である。そのため、やさ日チャットサポートの困難点が原因で日本語学習者の理解を助けられない部分があったとしても、それは問題ではない。なぜなら、日本語学習者にとっては「わからなかった」ことも大切な気づきの一つであるからである。やさ日チャットサポートが、日本語学習者がその場に参加する意義を見出す一つの助勢として活用されていき、誰にとっても「やさしい」未来が創られていくことを願う。

参考文献

- 庵功雄編著・志賀玲子・志村ゆかり・宮部真由美・岡典栄（2020）『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版
- 大谷尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案 ―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要・教育科学』54（2），pp.27-44.
- 大谷尚（2019）『質的研究の考え方―研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会
- 河内彩香・村田晶子・長谷川由香・竹山直子・池田幸弘（2021）「教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか―Zoom とGoogle Classroom を併用した日本語教育―」『多文化社会と言語教育』1，pp.30-45. 法政大学
- 中井陽子・丁一然・夏雨佳（2022）「オンライン日中交流会の利点と留意点―日本留学を目指す中国人学習者と日本の学部・大学院生の感想の分析をもとに―」『東京外国語大学国際日本学研究』2，pp.113-136.
- 日高友郎（2019）「オープンコーディング」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）『質的研究法マッピング』，pp.72-79. 新曜社
- 藤平愛美（2018）「日本文化科目の遠隔配信における授業形態と接続方法の連関性」『グローバル化時代における日本語教育と日本研究』ハノイ大学，pp.272-279
- 松岡里奈・立川真紀絵（2021）「同期型遠隔授業に参加した中国人大学生に対する意識調査」『授業研究』19，pp.27-40. 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 松岡里奈・中谷真也（2022）「複数大学合同で同期型遠隔日本語授業を観察する意義―他大学の日本語教育実習生から何を学べるのか―」『日本語・日本文化』49，pp.43-70. 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 村田晶子（2021）「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート―コロナ禍でのボランティア学生の取り組み―」『多文化社会と言語教育』1，pp.14-29. 法政大学
- 守谷智美・長野真澄（2021）「コロナ禍における「オンラインにほんごカフェ」の意義―参加者及びスタッフの視点から―」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』6，pp.67-86.
- 吉開章（2020）『入門・やさしい日本語 外国人と日本語で話そう』アスク

（まつおか りな 本センター特任講師）